

Technical Conference on Aviation Meteorology
[TECAM], Geneva, 5-9 Nov. 1979.

小野幸一, 山根皓三郎, 外崎得雄, 竹内和之, 1981:
定期運航旅客機により収集した突風資料の評価,
航空宇宙技術研究所報告, NAL TR-652.

小野幸一, 山根皓三郎, 1978: 突風荷重データの収
集および解析, 日本航空宇宙学会誌, 26, No 290,

127-132.

Reed, R.J. and K.R. Hardy, 1972: A case study
of persist, intense, clear air turbulence in an
upper level frontal zone, J. Appl. Met., 11,
541-549.

亙理宣夫, 1981: 航空力学Ⅱ—ジェット輸送機編—,
日本航空技術協会, 104-106.



富山地学会 編

豪雪——五六豪雪と
三八豪雪——

古今書院, 1982, 257頁, 2,000円

本書は昭和56年1月24日, 富山市立科学文化センター
で開催された「雪のシンポジウム」が契機となって生れ
たものである。評者の知る限りでは, 五六豪雪を中心と
したシンポジウムを, 日本気象学会はじめ, いくつかの
学協会が開いたが, このようなまとまった形で結果を公
刊したのはこの富山地学会が初めてではなからうか。

本書の特色は次の点にまとめられる。(i) 北陸を対
象にし, 特に富山県を中心にまとめあげた。(ii) 雪の
自然科学的側面ばかりでなく人間社会へのかかわり合い
を画きだした。(iii) 自然面でも気象学・気候学・雪氷
学ばかりでなく, 植物学などの問題もとらえている。
(iv) 人間社会面でも, 建物・生活・産業など従来かなり
論じられて来たことだけでなく, 教育・文化・高齢化
社会・除雪・消雪パイプ・新幹線や高速道路などの新し
い問題を画きだした。(v) 残雪の民俗学的視点, 雪の
利用にまで言及した。

このように, 「雪に関するすべて」を新しく総合的に
把握した点, まことに有益な書物である。しかも, 教科
書的な固さがなく, やわらかく読み通すことができるの
は, 執筆者が現地でもって多年の雪の生活を体験し,
その基盤の上に築いた学問をかみくだいて書いている
からであろう。本書のたくさんある成果の中で, 特に
重要なことがらば, あとがきに書いてある“シンポジウ
ムの討論ででてきた次のような共通認識”ではなからう
か。すなわち,

1. 北陸地方の雪は湿っていて, 降雪量は年によって
非常に異なる。したがって除排雪に難点が多く, 利用す
るにも問題がある。

2. 五六豪雪被害は, かつて雪に備えた生活の知恵が

忘れられ, “合理化”一辺倒に走ったためである。また
高齢化社会の到来と雪対策を考えなければならない。

3. 雪を利用する研究を推進しなければならない。そ
のため, 研究所などを設立する必要がある。

評者が特に興味を持った点を2~3記すと次の通りで
ある。(i) ユキツバキとヤブツバキがあることはこれ
まで知っていた。しかし, 富山県では海岸近くはヤブツ
バキで, 標高約500mから1200mくらいまでがユキツ
バキで, その中間にユキバツバキというのがあること。
(ii) いわゆる五六豪雪は4回の大きな山場があつたこと。
それは, 55年12月12~15日の前ぶれ寒波, 55年
12月26~30日の年末寒波, 56年1月2~8日の正月寒
波, 56年1月10~17日の中旬寒波である。(iii) 三八豪
雪とこの4つの山場の日付は異なるが, このようなサイ
クルはシノプティック気候学からみて, よくあるのでは
なからうか。今後の研究が待たれる。(iv) 福井県・石
川県に豪雪になる場合と, 富山県・新潟県に豪雪となる
ときがある。上空の風向だけでは説明できないのではな
からうか。(v) 大雪の長期変動の研究が意外におくれ
ていること。(vi) 屋敷林の詳細な調査が非常におもし
ろい。特に112~126ページの記述は本書の中で有益であ
る。(vii) 雪の生気候学ともいうべき, 傷病と年齢との
関係, 事故との関係などのオリジナルな表は雪国の学者
ならではあげられなかったろう。(viii) 交通問題では,
機械除雪の成果が上がったが, 一方, 市街地ではロータ
リー除雪機などが使えない路線が増加し, かえって人力
に頼らざるをえない箇所がでて, ここでの労働力の確保
が問題となった。(ix) 通学区が拡大してきて, 雪の影
響がひどくなった。

以上の通りである。雪の多い他府県の研究者ばかりで
なく, わが国の気候学・気象学者はぜひ一読されること
を望みたい。とにかく, 本書は近來の雪に関する書物
の中でも, 金メダルものと思われる。(吉野正敏)